

平成27年度

第60回 長野県中学校連合教科研究会

# 技術・家庭科

## 目 次

I	研究テーマ	1
II	研究の趣旨	1
III	指導者名、参加者名および参加校テーマ一覧	1
IV	研究問題と協議内容	2
	第1分科会（技術分野）	2
	第2分科会（家庭分野）	4
V	本年度の反省と来年度への方向	7
VI	あとがき	9

## I 研究テーマ

「生活に生きてはたらく力を高めるための題材、題材展開、評価のあり方」

## II 研究の趣旨

- ・ 学習指導要領による技術分野・家庭分野の目標や生徒の実態を分析して、それぞれの指導内容について検討していく。題材や題材展開、評価のあり方について実践を通して研究を進めたい。
- ・ つける力を明確にし、「生活に生きてはたらく力」を生徒の具体的な姿を通して語ることでできるような研究を進めていく。
- ・ 技術・家庭科としてこれからの時代を見通して、こんな題材を生徒にぶつけてみたいという、教材観にかかわる根本的な教師の思いにもふれていきたい。

## III 指導者名、参加者名および参加校テーマ一覧

### 指導者・司会者・記録者・世話係

	第一分科会	第二分科会
指導者	竹内 秀昌 先生 (長野県総合教育センター専門主事)	三澤 潤子 先生 (長野県総合教育センター専門主事)
司会者	木船 威 先生 (生坂中学校)	西村 頼子 先生 (筑摩野中学校)
記録者	原山 康則 先生 (清水中学校)	櫻田 祐花 先生 (鎌田中学校)
世話係	菊池 泰弘 先生 (附属長野中学校)	山下 紫織 先生 (附属長野中学校)

### 第一分科会参加者 (技術分野)

地区	学校名	氏名	単元名	研究テーマ
佐久	川上中	糊澤 孝樹	ロボットコンテスト	思考力、判断力、表現力を高めるエネルギー変換に関する学習
	立科中	佐藤 健二	エネルギー変換	生徒が主体的に学べる授業
上小	和田中	桜木 桃子	安心です。エコライトづくり	すべての生徒がわかる、楽しい授業づくりのための教師の支援のあり方。授業のユニバーサルデザイン化のための具体的な手立てのあり方
諏訪	下諏訪社中	小島 一生	STEMの考え方を取り入れたエネルギー変換の学習	自ら課題をもって追究し、自分の学びに充実感や達成感を味わえる生徒の育成
	富士見中	田中 達也	LEDライトを製作しよう	知り得た知識・技能をもとに願いをもち、実現に向け見通しをもって取り組む授業のあり方
下伊那	喬木中	小松 裕貴	エネルギーについて考えよう	「技術を適切に評価し活用する能力と態度」を育成するための題材展開の工夫と自己評価、相互評価のための取り組み
塩筑	生坂中	木船 威		レポートなし (司会者)
長野 上水内	附属長野中	菊池 泰弘	エスカレーターがよりよく動くプログラムを開発しよう	利用者の立場から技術を評価し、改善する力を高める指導の在り方
松本	清水中	原山 康則		レポートなし (記録者)
	安曇中	津金 一彦	LEDポケットライトの発展的な学習	SSRを用いた計測・制御はどのような利点があるか
	附属松本中	野澤 重徳		レポートなし

## 第二分科会参加者（家庭分野）

地区	学校名	氏名	研究テーマ
佐久	立科中	中島 萌	「家庭科の教材作りについて」（保育・幼児のおもちゃ作り・消費生活）
諏訪	岡谷北部中	長保 美也	活動・製作場面において、生徒が見通しをもって取り組み、自らの知識・技能を生活へ生かせる指導の工夫はどうあったらよいか
上伊那	赤穂中	北島 由香	必要感のある教材の製作を通して深める自己肯定感と品物の価値
安曇野	堀金中	小橋 光恵	生徒が問いや願いから自分の考えをもち、友と伝え合うことを通して考えを深める授業のあり方」～グループ学習の有効性～
長野 上水内	附属長野中	山下 紫織	工夫し創造する授業のまとめ方と評価のあり方
松本	鎌田中	櫻田 祐花	レポートなし（記録者）
	丸ノ内中	宮澤七夕子	レポートなし
	筑摩野中	西村 頼子	レポートなし（司会者）
	附属松本中	月岡 美紀	『A家族・家庭と子どもの成長』における高齢者との交流活動について

## IV 研究問題と協議内容

### 【第一分科会】

#### 研究会Ⅰ

##### 1. 討議内容

「挑戦！ロボットコンテスト～川上レタスを出荷しよう～」(川上中 糊澤考樹先生)

##### (1) レーダーグラフについて

・前時の段階で4つの性能を調べた。本時でグループごとにグラフを作り、発表の根拠とさせた。各グループで評価の差はあるものの根拠をもって発表することができていた。

##### (2) レーダーグラフの5観点の項目をどのように設定するか

・操縦性については、評価をしにくいのではないのか。全員が操作をしてみた平均を操作性として算出した。  
・エコや燃費を考える項目があってもいいのではないのか。身近な生活に直結していることが大切。

「生徒が主体的に学べる授業」(立科中 佐藤健二先生)

##### (1) 電池の性能で電圧に観点を当てたことについて

・電圧について目が向いたので電圧を考えたが、負荷をつないだときの電圧を測ることが大切ではないかと思う。

##### (2) 太陽電池を用いたことについて

・太陽電池を使って測定するときに電流のことまで考えなければ、測定をしなければいけないと思う。

「安心です！ライトづくり」(和田中 桜木桃子先生)

##### (1) はんだ付けについて

・抵抗器を使ってはんだ付けを行ったが、足を切らずに入れてしまったため、放熱が出来ていなかったのかもしれない。「山なり」を「富士山」と表現した方がよい。はんだは狭いところに入っていく性質を利用してはんだ付けするとよい。

#### 研究会Ⅱ

##### 1. 討議内容

「LEDライトを設計・製作してみよう」(富士見中 田中達也先生)

##### (1) 製作について

・低コストで製作を進めることができるようにした。約700円程度で全体の製作をすることができた。

また、使用条件や使用目的をもとに製作を行っていくなどの授業の流れを工夫することで製作の時間が短縮できるのではないかと思った。

「エネルギーについて考えよう」(喬木中 小松裕貴先生)

(1) 授業の内容について

- ・風力発電は日本に向いていないのではないかとされている。今回の授業内容では、送電の部分に焦点を当てるのではなく、発電の方法に重点を当てるようにした。

(2) 風力発電の評価について

- ・工夫・創造で評価を行っているが、事前にデータを示して生徒たちが考えられるようにしている。データをもとに羽の形や風の受け方を考えさせる。生徒の記述から工夫・創造を評価するようにしている。しかし、正確な評価ができていないと言われると分からない。

「エスカレーターがよりよく動くプログラムを開発しよう」(附属長野中 菊池泰弘先生)

(1) 授業の場面設定について

- ・それぞれの場面で出されていた条件は、病院では老人のことを考えてゆっくりにしなければいけないことや、危険を察知して止まるような仕組みを考えていた生徒もいた。相手のことに配慮して活動する姿を多く見ることができた。

「SSRを用いた計測・制御はどのような利点があるか」(安曇中 津金一彦先生)

(1) 分野で扱うことについて

- ・栽培の領域を使って授業をできればと思っている。

「STEMの考え方を取り入れたエネルギー変換の学習」(下諏訪社中 小島一生先生)

## 2. 指導者の先生より

- ・エネルギー変換の設計にあてる時間が少なくなってしまった。キットを使っていると、回路の設計はなかなかできない。なお、エネルギー変換の回路設計はすべて考えるのではなく、「選択」できればよい。いろいろな条件の中でどの条件を選ぶのか「最適解」を選ぶことが大切である。
- ・学び合いは、グループで活動すれば自然に生まれてくるということではない。「ロボコン」は、グループ追究になりやすく、評価しにくいので、個人で追究することを大切に、きちんと評価したい。
- ・生徒の興味を引くためにも、身近にあるものを使って活動することは大切である。さらに、技能習得のためには、長い時間を使うことが大切なのではなく、メリハリをつけて活動を行うことが大切である。教えることは教えて、考えるところは考えられるようにすることが大切である。
- ・写真などを見せることで生徒が視覚的に捉えられ、活動がしやすくなる。また、授業の流れを明確にしておくことで生徒にもわかりやすい授業になる。やはり、生徒にどんな力をつけさせたいかということが明確になっているかが大切である。生徒の実態を把握して授業をしたい。
- ・工夫創造の力をつけることに力を注ぐことが大切になってくる。データをもとに工夫し、創造することが大切であるので、データを示して考えられるようにすることが大切である。
- ・技術で大切にしていることは、専門的な知識をつけることではない。「この問題を解決したい」と考え、追究できるようにすることが大切である。生徒の身の回りのことと関わらせてから考えるようにすることが大切である。
- ・長野県内で技術の教員は少ないが、積極的に連絡を取り合って、ネットワークをしっかりと情報交換を綿密にしていくことが大切である。
- ・技術の授業の楽しさとは何か答えられるだろうか。やはり、自分自身が「技術がおもしろい」と思うようになることは大切である。そのために日々の研修が必要であり、ものを作るだけではなく、それまでの過程を大切に楽しさ、よさを伝えたい。ものの作り方を教えるのではなく、ものづくりを通して、考えられるようにしなければならない。技術の教師みんなが互いに助け合い、高め

合っていききたいものである。

(文責 清水中学校 原山康則)

## 【第二分科会】

### 1. 研究会 I、II (レポート発表より)

- ・一校一人という状態でなかなか相談できない環境があるので、悩みを共有し合いたい。
- ・新卒の先生が多くいらっしゃるということで、題材や教材についての情報を交換したい。
- ・思考力・表現力を高めていくための話し合い活動を盛り込み、実生活に生かしていくという単元展開を心がけている。

### 2. 討議内容

「つける力」の評価の方法は具体的にどのようなものがあるか。

学校で学んだ知識・技能を日常生活へ活かせる指導の工夫 (岡谷北部中 長保美也先生)

#### (1) 質問・協議

- ・2年生で行っている栄養素の単元は、どのような内容で時数はどれくらいか。  
→5時間扱い。栄養素の働きの確認とよりよい献立の作成。
- ・1食分の献立の作成の題材について  
→お弁当の日があるため、そのお弁当の献立を作ればよしにしている。(赤穂中)  
→冷蔵庫にあるもの畑にあるもので献立を考えさせるなど、より実践的に考えさせてもいいのではないか。(赤穂中)

#### (2) 指導者の先生より

- ・食事の役割を考える場面で、受け身的な学習にならないように、食品カードを使うことで興味を引く導入になっている。
- ・食生活分野の導入としては、「自分の食生活はどうか」について考え、普段の食生活を振り返ることで課題を持たせたい。それをもとに食事の役割について考え、食生活に関心を持ち学習していくことが、食生活をよりよくしていこうという姿へつながっていく。
- ・つける力の評価方法は、その時間のねらいによってかわってくる。どの観点で評価するのか明確にし、子どもの発言や活動の姿、学習カードの内容などから評価していく。評価規準を明確にし、子どもの姿を見とっていききたい。

「生徒が問いや願いから自分の考えをもち、友と伝え合うことを通して考えを深める授業のあり方」

(堀金中 小橋 光恵先生)

- ・布を提示し、「縫い代の始末の仕方」、「縫い方」、「留め方」の一覧を生徒に提示したことは、生徒がほつれないように縫い代の始末をすることや留め具が必要であることに気付き、運動会で園児が手首に巻く衣装にするための方法を考えることに役立ったか。→豊かな発想につながるための工夫・仕組み方になっていたか。
- ・布を試しに縫ったり、留めたり、手首に巻いたりする場を設け、肌触りや丈夫さを意見交換できる学習カードを用意したことは、運動会で園児が身につけることを意識して縫い代の始末の仕方、縫い方、留め方を選択することにつながったか。→活発に意見を出し合う、聞き合う、取り入れるグループ活動の有効性

#### (1) 質問・協議

- ・幼児の腕に巻くリストバンドを製作した(本教材を選んだ)理由は何であったか。  
→保育の学習で、「もっと幼児と関わりたい」「幼児のためになることをしたい」という願いから本題材を決め出した。
- ・縫い代の始末の仕方や縫い方など事前に見本を提示したか。

→事前に具体的には見本を提示せず一緒に考えていった。

- ・2年生でこの題材を扱ったということであるが、1年生で衣生活の題材は扱っているのか。また、1時間で扱う技能（まつり縫い、しつけなど）が盛り沢山であったが、どう支援したのか。

→1年生では全く衣生活の題材は扱っていない。その場で学びながら仲間の様子を見ながら、調べながらそれぞれの技能を習得していく。

- ・プレゼントをした幼児たちの反応はどうであったか。

→全員で届けに行く時間がなかったので、「運動会を応援したい隊員」を結成し、代表者が届けた。運動会の様子や渡す姿等をビデオにとって学級ごとに流した。

## (2) 指導者の先生より

本授業は「A 家族・家庭と子どもの成長」と「C 衣生活と自立」の内容の融合。この題材は「C 衣生活と自立」で扱いながら、保育の学習でふくらんだ生徒の願い・思いをもとに、題材展開の位置づけを工夫している。縫い代の始末の仕方、縫い方、留め方の3つに焦点化することで、子どもたちがかわりあいながら追究する姿につながっていくよさがあった。グループ追究では、自分の考えのもとになるワークシートや意見交換の内容がわかる学習カードを使う際、視点を持って話し合うことが大切になる。自分の課題に向かって各自が製作できればいいが、今回のように、グループで製作することもある。願いや課題意識を互いに共有しながら、問題課題解決的な学習を大事に考えながら行っていきたい。

『「A 家族・家庭と子どもの成長」における高齢者との交流活動について』

- ・他教科とのつながり（教科横断的な取り組み）について
- ・高齢者との交流を本単元で扱ったことについて（高等学校家庭科で扱う内容・社会科）
- ・「A 家族・家庭と子どもの成長」の題材例について（附属松本中 月岡美紀先生）

## (1) 質問・協議

- ・環境教育・高齢者教育、消費者教育などは教科の中だけでなかなか扱いきれないものであるが、今回の実践のように突き詰めて行っていくことも大切ではないか。
- ・小中高の題材の設定や他教科との関わりについてはもっと系統的に進めていかなければならない。（例.まつり縫いは小学校でも中学校でも高校でも扱っているが、なかなか大学生に定着していない。）
- ・自己肯定感が育っていない段階で高齢者の内容を中学校で扱うことはどうか（少し危険である）。まずはやるべき内容が多い家庭科で、やるべき内容、育むべき心が育った段階で扱う必要があるため、高校で扱うと明記したほうがよいのではないか。

## (2) 指導者の先生より

A 家族・家庭と子どもの成長では幼児との触れ合いを題材にする学校は多くあるが、高齢者との関わりを扱っている学校は少ない。その中で本題材を扱っていることは参考になる。「自分の成長と家族」という内容が中学校で扱う題材になっているが、「これからの自分について」や、「今後について考える」という点において貴重な実践である。検討していく内容としては、他教科との関わり（福祉）や、家庭科における評価を吟味して扱っていく必要がある。

「家庭科の教材作りについて」（保育・幼児のおもちゃづくり・消費生活）（立科中 中島萌先生）

## (1) 質問・協議

- ・新卒1年目、講師でありながら、1校1人という状況の家庭科であるので、なかなか悩みを共有したり、題材について相談したりする相手がいないというのが現状である。ただ、こういった研究会に参加をすることで多くの意見を吸収できるので大いに参考にしてほしい。また、横のつながりを大事に、近隣の中学校の先生方とのネットワークが作れてくると良い。

## (2) 指導者の先生より

- ・体験的、実践的な活動を取り入れながら授業づくりを工夫されている。学んだことが果たして社会に出た時、あるいは家庭に戻った時に使えるかどうかは身を持って体感し、習得したことが土台になってくる。
- ・本時のねらいは何か、そのための手立ては何か、最後の見とどけをきちんと行う事が大事である。体験的・実践的な活動だけで終わらないように、つける力や評価を大切にしながら子どもたちの学びにつながることを、生活をよりよくしようという実践的な態度につながっていく。

「必要感のある教材の製作を通して深める自己肯定感と品物の価値」

- ・技術・家庭科の授業数を増やしていただけるよう、実践を積み重ね、教員も生徒も時間数が欲しいとつぶやける家庭科学習にして行きたい。  
(赤穂中 北島由香先生)

#### (1) 質問・協議

- ・北島先生のように生徒を本気にさせる指導力  
→何をさせるかではなく、どういう風に題材に出会わせるか。「安全」と「条件」だけ絞る。見本や引き付ける教材、写真などは十分に用意しておく。

#### (2) 指導者の先生より

必要感のある題材を位置づけることで、子どもたちが本気になる。そして、もっとこうしたいという学びの意欲や、他者との関わりが増えてくる。本気になって学習・製作することで、学んだことの充実感や達成感を味わい、それが実生活に生きる姿につながっていく。時数との兼ね合いもあるので、事例のように手ぬぐい製作の中で消費者教育も組み込んでいくなど、他領域と関連させながら展開させていく工夫も今後大切にしていきたい点である。

工夫し創造する授業のまとめ方と評価のあり方(附属長野中 山下紫織先生)

#### (1) 質問・協議

- ・模型の縮尺→20だと大きくてやりにくくて、60だと小さい。30程度の縮尺だったはず。

#### (2) 指導者の先生より

- ・教材化をしっかりとされている。自分で教材を手作りで作ったという点。体験することで、子どもたちの意識とつなげながら、実感させながら、確かな理解へと導いていくことができる。備品は、計画的に学校予算などで購入して住居の教材として有効に使っていきたい。グループで話し合う時に観点を持たせることがとても大事。今回は3つの観点が設けられている。話し合いを追及していくためにもまとめていくためにも、それらが窓口となり、多様な見方・考え方に広がっていく。
- ・評価のあり方としては、その時間にどのようなつぶやきがあれば、また学習カードのどのような表記があればBなのかなどと決めておくことが大事。グループ学習の活動や子どもの学びをとらえるためにも、終末の子どもの姿をイメージし、評価をどうするか明確にしておく。

### 3. 指導者の先生より

#### (1) 信州大学教育学部 福田典子先生より

- ・多面的な方法の特徴・評価方法を研究していく必要がある。
- ・押さえなければいけない内容は基礎的・基本的なことにとどめて、自由度があってもいいのではないかな。
- ・学習内容とカリキュラムをバランスよく組み込んでいくことが大事。
- ・グループワークの効果的な指導法は、「グルーピングの構成と自由度」、「時間の管理」、「見える化」の3つのポイントを押さえることである。
- ・家族の領域は、小中高の発達段階に応じたカリキュラムを検討していく必要がある。(例、幼児の学習・高齢者の学習 基礎縫いで習得すべき内容(まつり縫いは小中高それぞれで扱っているので、必要かどうか))

- ・今までは他教科で学習した内容をどう家庭科で生かしていくかを意識していたが、教科の学習がどう他教科に生かされるのかという視点で考えている点が良い。他教科でどう家庭科の教科を生かしていくのか。

- ・用と美を兼ねた、使用に耐えるものを作ること。家庭科教員の材料（用具）の選定力。

- ・題材選びは技能・人数に応じた自由度の比率を考えることが大切である。

(2) 長野県総合教育センター専門主事 三澤潤子先生より

- ・「本時のねらい」を据えてしっかりスタートする。教えることは何か、逆に考えさせることは何かをしっかりと据える。

- ・題材との出会わせ方。ストーリー性のある題材展開を盛り込むことで、学習意欲も湧いて生活と結びつけた学習になっていくのではないかと。中学校は3年間であるが、小学校で学習したこととの関連性や、高校での学習との関連など、小中高の系統性をおさえ、指導していくことが必要である。

- ・評価では、評価基準をしっかりすえて、つける力がつくよう大切に扱っていききたい。

- ・生活に生かす視点。今日の授業の振り返りをすることはできるが、今後の生活に生かす視点をもたせるといことも行っていききたい。

#### 4. 研究会Ⅲ、Ⅳ・・・実習「巾着袋の製作」

指導者 徳嵩よし江先生（工房のどか）

家庭科教育がどれほど人間教育を作っているのか。家庭科教員自身が、きちんと家庭科教育に自信と誇りを持っているかが大事。日々の激務や授業に追われてしまってゆとりがなくなってしまうのはもったいない。そのため、地域の方々とプロデュースして教員がどれだけ自分を肥やすかが大事である。老人の方が経験が豊かなので、そういう力をぜひ有効的に活用してほしい。子どもがやる事に許容の力が弱く、「昔は先生が言ったんだから」という寛容の姿があったが、今は何かと非難（バッシング）されやすいのが現状である。指導を行っていく中で、キャラクターものを使う事は、著作権にかかわってくるので気を付ける必要がある。「それはあなたが作ったものじゃないよ」と言うことが大切である。家庭科は生きる力の総合人間力を養うことができる。最近では個別指導で教えてもらえるとあって話を聞いていない生徒が多くなっているの、見て学ばせるといことも大切にしていきたい。家庭科の先生方には、地域の「ばあさん力」を使ってほしい。「家庭科」という呼び名ではなく、「人間生活学科」という呼び名で、普及させていきたい。

(文責 鎌田中学校 櫻田祐花)

## V 本年度の反省と来年度の方向

◎本年度の反省

項目	内容
○本年度の研究テーマについて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度は『慣れる』をテーマに活動をしてきた。</li> <li>・全県テーマについて考えずに学校個人で研究を進めてしまった。</li> <li>・生活につなげることは考えていかななくてはならないことであり、良いと思う。</li> <li>・生活に生きてはたらく力を高めるということで、より具体的で将来を見据えたものが出てきていた。</li> <li>・「共に」のところが家庭科のグループ学習として良いと思う。</li> <li>・「実生活に生きる」というのは技術・家庭科にとって、とても重要なものだと思う。</li> <li>・悩めるところのテーマについて研究できたのでよかった。</li> <li>・よいと思う。</li> </ul>



○研究の主な内容 と研究の成果に ついて	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究する時間がなかった。</li> <li>・生活に生きてはたらくかどうかについては、中長期的な視点が必要に思う。</li> <li>・現在、共に学ぶことはできても発表となると…</li> <li>・様々なレポート・実践から学ばせていただいた。</li> <li>・若い先生方も頑張られていたので感動し、いろんな題材や評価も勉強になった。</li> <li>・他校の先生方の実践例をたくさん知ることができ、とても勉強になった。</li> </ul>
○研究の方法や経 過について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より中長期的視点で複数の単元から考えたい。</li> <li>・ワークシートだけでなく、教材や資料、製作したものの実物を見てみたいと思 った。</li> <li>・いろいろな角度からご意見いただきありがたかった。</li> </ul>
○研究会当日の運 営について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで通りで良いと思う。</li> </ul>
○研究集録等の Web ページ掲載 について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページをよく見て確認できた。</li> <li>・困ったときにはホームページを見て解決することができたのでよかった。</li> <li>・F A X等でやり取りするよりも楽だった。</li> </ul>
○本年度運営全般 について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・よかった。</li> <li>・とても勉強になった。</li> <li>・時間の配分をしていただいていたとよかった。</li> <li>・いろいろ細かな配慮をしていただきありがたかった。</li> </ul>

◎来年度の方向

○来年度の 研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・継続でよいと思います。ものづくりから離れていかないことを願います。</li> <li>・ほぼこの方向でよい。</li> <li>・生活に返すという部分を強めてもいいかなと思う。</li> <li>・ユニバーサルデザイン化、全ての生徒が分かる授業について考えたい。</li> </ul> <p>→来年度もこのテーマを幅広くとらえながら進めていく。</p>
○来年度の 研究の趣旨	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自ら良さを感じられる支援について考えたい。</li> <li>・生活に生きてはたらく力というものは、身につけた技能であったり、家族・幼 児への考え、接し方など、目に見えないものでどう評価していくかとても難し いと感じる。生活に生きてはたらく力を高めていく手段を皆さんで探っていけ たらと思った。</li> <li>・『生きてはたらく力』がどういうものをさすのか具体的にしたい。</li> </ul>
○来年度の 研究の方法	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教材研究、授業実践を重ねていきたい。</li> <li>・題材やワークシート等実物を持ってきてもらおうとよい。</li> </ul> <p>→授業で実際に使っている学習カードや生徒の作品を更に持ち合えると良い。</p>
○その他、 改善したい点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・折角各校が準備したレポートについてももう少し時間をかけて協議したい。</li> <li>・各校のレポートをもっとお聞きしたかった。</li> <li>・レポートが間に合わないことがあるので、メールがあった方がありがたい。</li> <li>・初めて参加した。学習になることが多く、充実していた。</li> <li>・ワークシートを持ち寄って、もっと長く互いに見せ合ったりしたかった。</li> <li>・実習もあり、いろいろと勉強させていただいた。</li> </ul>

- ・今回レポートが6つ（家庭科）だったが、午前だけでは発表・討議の時間が足りなかった。パワーポイントを丁寧に準備してきてくださった学校もあり、午後も発表の時間にしてもいいかもしれない。午後は講師の先生をお招きしての実習であったが、現役の家庭科の先輩の先生方に実際どのような授業をされているのか模擬授業のようなものをしていただくのも若い先生方にはとても勉強になると思う。
- ・普段一人の教科である。こういう機会しかなかなか集まれないので夜に懇親会をやってもいいかもしれないと思った。
- ・教育課程をやった学校に声をかけ、参加を促したいと主事先生がおっしゃっていた。多くの学校に参加を呼びかけ、技術・家庭科を盛り上げていきたい。  
→先生方の実践から刺激を受けた。より多くの先生に参加していただき、実践を知り合い、語り合う場としていきたい。

## VI あとがき

紅葉した落ち葉が舞い散る 11月20日、県下各地からお集まりいただいた先生方の熱心な発表と討議により、大きな成果をあげて長野県中学校連合教科研究会を終えることができました。普段一人で担当しているこの教科の者としては、このように集まって日頃の実践や生徒の姿について語り合える場が何よりうれしく、また心強く感じられました。来年度は更に多くの先生方にお集まりいただき、今年度以上に研究会を盛り上げていきたいと考えております。

終日にわたる研究会において、終始温かく丁寧にご指導いただきました長野県総合教育センター専門主事の竹内秀昌先生、三澤潤子先生に心から感謝申し上げます。また、綿密な司会計画を立て、研究会を実りあるものにしてくださった司会の木船威先生、西村頼子先生、ご多用の中当日の記録及び研究集録のまとめにご尽力いただいた記録者の原山康則先生、櫻田祐花先生に深く感謝申し上げます。

さらに、日々の実践や作品を持ち寄り、研究会を深めて頂きましたご参会の先生方、また、これからの授業に活かしていくことのできる貴重な体験をさせてくださった講師の皆様にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

委員長 月岡 美紀  
副委員長 菊池 泰弘